他力

ー住職便りー

第28号（令和四年八月）
専徳寺住職　弘中満雄

【夜半の嵐】

今月二十五日は安倍晋三元首相の四十九日です。選挙前の突然の訃報でした。

国葬の是非や政治と宗教の問題が話題となっていますが、個人的に故人を偲びつつ思うのは二つです。一つは、

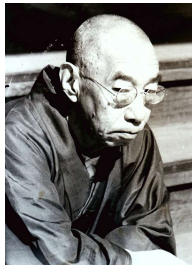
明日ありと　思う心の仇桜
夜半に嵐の　吹かぬものかは

親鸞聖人九歳の歌です。自ら得度（僧侶になること）する決意を詠われました。

今を盛りと美しく咲いている桜も、夜半に強い風が吹けば散ってしまいます。明日何があるか分からぬ身。急ぎ仏法を聞く身、お念仏を喜ぶ身とさせていただきたいものです。

【鉄砲の反対】

もう一つは高光大船師の逸話です。師は、北陸の有名な浄土真宗の僧侶で、ある時、ご門徒の家で行われる報恩講のご法事に出かけ、そこにいた若者に声をかけました。


【高光大船】

【高光(高)】あんちゃんも今日の報恩講に参ってくれるか。ありがとう。
【若者(若)】今日は厄日や。
【高】なんでや。
【若】おら今日非番やで、これから映画でも見に行こうかと思っとったら、両親が「参ってくれ」とあんまり頼むから、おら仕方なしにおるがや。
【高】厄日でもなんでもよい。よう参った。ところで滅多に会わんのやから、仏法について何か聞いてみんか。

一

【若】ならその「仏法」って何や。
【高】仏法はな、鉄砲の反対じゃ。
【若】なんや、鉄砲の反対って？
【高】鉄砲はな、生きとる者をドスーンと殺すのが鉄砲やろが。仏法は「死んだ者」を生かすのが仏法や。
【若】なんじゃ、あの棺桶に入っているのを生かすのが仏法か。
【高】バカタレ。あれは死骸や。あれは「死んだ者」じゃないわい。
【若】そんなら、どんなのを「死んだ者」と言うのや。
【高】お前さんのようなのを、「死んだ者」と言うのや。
【若】バカにするな。おらは生きとる！
【高】それは動いとるだけじゃ。生きとるんじゃない。お前さんの商売（国鉄の機関車の運転手）で言えば、機関車に石炭をパクーパクーと放り込んでやると、定められたレールの上をカタコトカタコト走り出す。あれは動くのであって、生きとるのじゃないわいの。お前さんも、三度くのまんまを口の中へパクーパクーと放り込んでやると、習慣という定められたレールの上をカタコトカタコト走り出す。それは動いてるのであって、生きとるんじゃないわいの。

この言葉に自分の姿を知った若者は、仏法聴聞の生活を送ったそうです。

（参照『死すべき身のめざめ』）

【アリとキリギリス】

明日、何が起こるか分からぬ人生です。「だからこそ今を楽しんで生きよう！」では、まるでイソップ寓話のキリギリスです。お念仏の習慣、お忘れなく。（終）